

降誕節第4主日 説教 「こんなはずじゃなかった」要旨

牧師 黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会 2023年1月15日

マタイによる福音書 13:53-58

降誕節第4主日を迎えました。そこで、私たちが今深く実感していることは、主我らと共にいます、この現実です。特に、この思いを深めつつ、過ぐる一週間を過ごしたのがこうして主の御前に集う私たちでありました。先週の日曜日、私たちはイエス様の命を共に分かち合い、イエス様の命に生かされていることを共に味わい知らされる者であったからです。そして、このことはまた、「この私」が「この恵み」に与り、良かった良かったというだけで終わる話ではないということです。私たちがイエス様の恵みに与るということは、「この私だけ」が救われて良かった、ということではないからです。なぜなら、神様が世の始めより私たちに期待することは、そういう個人的で独りよがりなものではないからです。それは、イエス様という神様の独り子をこの世にお遣わしになり、その愛する御子イエス様を十字架に付けてまで現そうとされた、神様のこの御心を考えれば分かることです。もし御子を十字架につけ、甦らされた私たちの神様が独りよがりなお方であるなら、そんな回りくどい方法を取ることはなかったはずだからです。それゆえ、私たちの神様はその独自の考えを押しつけ、私たちを意のままに従わせ、操ろうなどとはお考えになりません。もし、私たちの神様がその独自の考え方に固執し、私たちを意のままに操ろうとしているなら、私たちの生きる世界は、表面上はもっと穏やかで平安な、誰もが満足するであろう満ち足りたものになっていたはずだからです。ところが、現実はそのようではない、それは、神様の力が及ばなかったからではありません。

世界の初めについて御言葉が語るころは、神様が世界を秩序あるものとし、その世界の秩序を保つ役割を私たち人間に与えられたということです。このことはつまり、私たち人間には、世界をより良くする力が神様によってはじめから与えられているということです。しかし、それにも関わらず、私たち人間はその道を逸れてしまう、世界の混乱の理由はそれゆえのことでもあります。それについては、イスラエルの歴史が明らかにするところでもあります。ただ、私たちが道を外れてしまうのは、私たちの考えるところが誰の目から見ても常に不埒であるからではありません。

イスラエルの歴史が明らかにするところは、皮肉なことに神様を一生懸命信じようとしているがゆえに道を外れてしまう、そういうところがないのではなく、あるということでした。それは、私たち人間には、神様を利用してまでも自分の思いを遂げようとするところがあるからです。ですから、イエス様が私たちに与えられたのは、私たちがそうならないように私たち人間を導くためでもあります。ですから、私たちがこのイエス様と共にあることに大きな希望を見出すのはそのためです。それは、このイエス様によって私たちが自分の思いや考えを大きく超えて、必ず変えられていくものでもあるからです。先週、私たちが御言葉から聞いたことはこのことでもあります。それは、私たちがイエス様と共にある交わりに生かされているからです。ところが、この天の御国の奥義を知らされた私たちに、御言葉がその最後に語ることは、耳を疑いたくなるような話でありました。

御言葉がここで語ることは、イエス様の家族、同郷の人々の、イエス様に向けられたその無理解についてであります。その理由についてイエス様は「預言者が敬われないのは、その故郷、家族の間だけである」と仰るのです。そして、こう仰る理由を聞いていくと、なるほどそういうものかとの想像も成り立ちます。会堂で教えられているイエス様を見て、家族、故郷の人々が「この人は、このような知恵と奇跡を行う力をどこから得たのだろう。この人は大工の息子ではないか。母親はマリアとい、兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。姉妹たちは皆、我々と一緒に住んでいるではないか」と言って躓いたとあるように、自分の経験や物差しを基準としてイエス様を見て行く時に、どうしてもそれが邪魔になって、ありのままを受け入れることができないからです。それは、イエス様との関係性がある意味で固定化し、出来上がっていたからでもあります。つまりは、家の子に限ってということの逆パターンがイエス様の家族、同郷の人々の間に起こったということです。ですから、そういう意味で、イエス様の家族、同郷の人々は変わる必要があった、では、彼らはどうすれば変わることが出来るのか。それは、イエス様を下にも置かないということ

ではありません。

下にも置かないということは、敬意を表すだけでなく、そこにはその力を利用しようとする浅ましさを同時に見る事ができるのです。ですから、御言葉がここでイエス様がほとんど奇跡を行わなかったと言っているのは、もしかしたら、そういうことがあって、それで自分たちに利益をもたらさないことに家族、同郷の人々が苛立ち、結果、イエス様に躓いた、可能性の一つとしてそう考えることもできると思います。ただ、私たちがここで考えなければならないことは、イエス様の家族、同郷の人々の人間としての浅ましさをあざとさといった、いわゆるゴシップネタのようなものではありません。イエス様とイエス様の家族を人間の負の側面に引きずり下ろして、そういうところが人間にはあるよね、ある、あるというところでこの御言葉の理解にいくら努めたところで、そこから得られるものは何もないからです。むしろ、ここでのことに限らず、この手の分かりやすさというものは、私たちが御言葉を深く理解しようとする時、まさに十字架と復活の出来事がそうであるように、逆に作用する場が多いからです。つまり、私たちと近いところにイエス様を意図的に置こうとする試みは返ってイエス様を遠ざけてしまうだけであり、躓きが避けられないのはそれゆえのことだということです。ですから、ここに記されていることは、天の御国の奥義を数週にわたって知らされ、イエス様のことをとて近く感じてきた私たちにとっては、深刻な問題を孕んでいるように思います。

ここで登場している人々がどういう人たちなのかと言えば、それは、誰よりも長く、しかも、濃密な時間をイエス様と共に過ごした人々でありました。このことはつまり、イエス様と共にあるということの一つのあり方が、イエス様の家族、同郷の人々の姿を通してここに現されているということです。ところが、この誰よりもイエス様のことをよく知っているはずの人たちがイエス様に躓いた、それは、「この人は、このような知恵と奇跡を行う力をどこから得たのだろう」と御言葉が語るように、彼らはイエス様の変化について行くことができなかつたから、あるいは、自らの価値観、経験則という狭い枠の中にイエス様を押し込もうとしたから、彼らが躓いたのはそういうことでもありました。ただ、このことはつまり、彼らは神の子であるイエス様と長くを共にしていながら、何一つ変わることができなかつたということです。ですから、このことは私たちにとって

は衝撃的であるだけでなく、様々な点で深刻な事態をもたらすことになります。それは、イエス様とその近くにどれだけ長く一緒にいたとしても、人は何一つ変わることはない、このことを実証しているかのように見えるからです。それも、近ければ近いほどそれが難しい、イエス様のその誕生からその時までのすべてを知っている父ヨセフと母マリアすらイエス様に躓いたわけですから、人は変わらないどころか、そもそもそのところで変わることができない、イエス様との近さがこの点を明らかにしているようにも思えるからです。

ですから、このことは私たちにとっては他人事です。まことはできません。信仰上の深刻な問題であり、何としてでも解決しなければならぬ課題だとも言えるのです。ただ、この、家族、同郷の人々の無理理解が示すところは彼らだけの問題ではありません。その家族、同郷の人々が躓いたということはつまり、人の子としてのイエス様にとっても、ここでのことは大きな躓きであったということです。しかし、それは、イエス様にとっても、その家族、同郷の人々にとっても必要なことでもありました。私たちにとっての躓きでしかない主の十字架が、そこで躓くからこそ神様の御心が明らかにされるように、ここでの躓きはそれゆえ、避けられないものでもあったからです。ただし、この躓きの本質は、イエス様と近いことではありません。近いところで私たちが何を見ようとしているのでしょうか。躓くことによって、また、躓くからこそ、この見るべきことがはっきりすることになり、そして、この見るべきところとは、イエス様が高きにありますお方ではなく、低きにありますお方であるということです。ですから、そういう意味では、イエス様の家族、同郷の人々の見方はあながち間違っていたわけではありません。あのはなたれ小僧のイエスがどうして預言者なんだ、そんなはずはないじゃないかと彼らが思ったのは至極当然のことでもあったからです。ただ、何かが違う、共にいますイエス様のことを私たちが正しく見つめるためには、この何かが違う、というところがはっきりと分かる必要があるのです。そして、ここに福音の本質があり、また、そこにイエス様の近くに集められた私たち信仰者の本当の姿を見ることになるからです。そこで先ず言えることは、イエス様によって明らかにされた福音とは、私たちの手の届かない、高級なものではないということです。イエス様が低きにあるということはそういうものであり、だから、そこには一時の満足、一瞬の快樂で終わらない喜び

があり、そして、この喜びが私たちが人として本当の意味で御心に適った形で変えることになるのです。そして、それが「生かされる」ということでもあります。ただ、子どもの頃、親の有り難みというものがまったく分からなかったように、福音を福音として受け止め、この福音が胸にストーンと落ちるためにはそれ相当の時間がかかるものです。そして、時間がかかるということは、分かるまでを忍耐し、その時を待ち望まねばならないということでもあります。ところが、待てといわれ、素直に待つことのできる者は多くはないのです。私たちが上にあるものを引きずり下ろしてでも、欲しいものを手にしようとするのはそのため、また手に入らないがゆえの苛立ちからなのではないでしょうか。下にあるものを蔑み、虐げるのはそのためです。そして、それが低きにあるということでもあります。ですから、低きにあるということは、教会の歴史がそうであり、また、自らのその足下を見ても明らかなように、そういう浅ましさ、卑しさとは決して無縁ではないのです。けれども、イエス様が私たちと共にあるということは、そこにイエス様がそれでも共にいてくださっているということなのです。それゆえ、福音の確かさというもの、天上のきらびやかな王宮で実感させられるものではなく、私たちの生きるこの低いところでこそ体験させられるものなのです。

ですから、そこで大事なことはイエス様が私たちと「同じである」ということです。人として生きたイエス様が傷つくこともなく、また、人から見下されることもなければ、神の子とはそんなものかとの思いに陥ってしまうからです。けれども、イエス様はそうではなかった、人から見下され、深い傷を負ったのです。しかし、それはそれで問題があるわけではあります。なぜなら、私たちと同じであれば、このお方に何かを期待しても仕方ないということにもなるからです。ですから、イエス様が深い傷を負ったのは、この私たちと同じであることから生じる、そうした錯綜した私たちの思いによるものでもあります。けれども、これこそがイエス様が低きにあり、私たちと共にあることを明らかにしてくれているのです。そして、イエス様はこの経験をここではその家族、同郷の人々の間でしたわけですが、ですから、ここではイエス様の心の動きについては一切触れられてはいないのですが、けれども、そのような中でイエス様もまた私たちが思い、感じることと同じ思いを抱いたはずなのです。

それは、理解して欲しい、でもどうして

理解してくれないのか、イエス様が私たちと同じ人として生きた以上、このネガティブな感情がまったく湧き上がらなかったということは考えられません。けれども、御言葉がそれをあえて言葉にしていけないのはどうしてなのでしょう。それは、イエス様が私たちと「同じである」ということを私たちに誤解させないためです。つまり、同じでありながらも、何かが違う、その心中を詳らかにしないのはこの、何かが違う、との気づきを与えるためだと思ふのです。そこでもう一つ、私たちが気づくべき大切なことがあります。それは、私たちイエス様とが共にあるということ、イエス様と共に歩む私たちがイエス様にとっての家族であるということ、この御言葉から分かることは、イエス様と共にあるということについても、私たちがイエス様の家族であるということについても、御言葉は決して理想化してはいないということです。そして、私は、私たちが自らの信仰や教会というものを考えていく場合、この理想化しないと言うことがとても大切なことのように思ふのです。なぜなら、私たちが貴いものを頭の中で考えようとするとき、どうしても理想的な姿を思い描いて、御言葉が言わんとしているところから大きく外れてしまうことがあるからです。

ここで明らかにされていることは、聖家族の持っている一つの問題性であるのは間違いないです。そして、それは、イエス様と共にあるからこそ、聖家族、その故郷において浮かび上がったことでもありました。ただ、その問題が発生したのは、彼らだけに問題があったからではありません。彼らをしてそうさせた理由はイエス様にもあり、そもそものところで言えば、共にあるということも、家族であるということも、そういうものでもあるからです。私たちはそういうふうには思わないのかも知れませんが、聖家族、故郷の人々にとっては、イエス様こそが問題なのであり、従って、改めるべきはイエス様に他ならない、それが彼らの見方でもありました。ただ、そこで言えることは、そうであればこそ、その彼らこそが変えられなければならないということです。けれども、改めよ、変わらねば、そう言って直ぐに何かが変わることがあるのでしょうか。長い時間をかけて作り上げられてきたものを変えることがどれほど難しいかは私たちはよく知っています。特に、一端築かれた家族関係のような強固なものを機械的にシステムチックに、人間の理屈に合わせて変えることは、それが仮にできたとしても、体裁を整え、変えること自体がその目的となれば、結局はや

らない方がよかったということにもなるからです。ですから、イエス様と近い関係にある人々によって構成されるコミュニティの課題は意図的に無理矢理変わろうとすることではありません。手段に過ぎない変化を意図的に目的化することは、今世界で起こっていることを見ても明らかなことですが、人は力による現状変更をも厭わない、愚かな行動に簡単に身を委ねることにもなるからです。

私たちが「変わるべきだ、変わらなければならぬ」とそう思うであろう、イエス様と近い関係にある人々に向かって、ここでイエス様は特別なことは何もなさいませぬ。その理由を御言葉は彼らが「不信仰であったから」と言うのですが、それは確かにその通りです。それゆえ、イエス様のこの言葉はとても重く、特に、イエス様と共にあり、そのお側近くで毎日をごす私たちにとっても、「不信仰」というこの言葉はとても重く響くこととなります。けれども、この「不信仰」という言葉は、イエス様の家族、同郷の人々にとっては避けることのできないものでもありました。このことはつまり、「不信仰」というこの言葉は、この時のイエス様の近くにあるありのままの状態を示しているということで、つまりは、この言葉こそが彼らがイエス様によって変えられていく上での原点であるということです。ただ、彼らにとって、自分たちのありのままの姿を見つめることは辛く、苦しいことでもあるのでしょう。この痛みゆえに、目を背けたくなるのでしょう。しかし、イエス様はそんな彼らのことを無理矢理変えようとはしないのです。それは、諦め、見捨てたからではありません。もしかしたら、彼らはイエス様の振る舞いを見て、そんなことを感じたのかも知れませんが、だから、彼らは更なる躓きを覚えることにもなった。けれども、その彼らが、イエス様が十字架の道を辿る中で福音を宣べ伝える者へと変えられていった、つまりは、福音に生きるものとされていったのです。それは、彼らが信仰心篤く、イエス様の覚えめでたい人々であったからではありません。彼らが変えられていったのは、イエス様に不信仰と言われたこの原点に立たされたからであり、それゆえ、イエス様に躓き、イエス様を遠くに感じることもなったのですが、けれども、その彼らとの近さを常に心に留め、十字架へと向かわれたのがイエス様というお方でもありました。

不信仰という自らの原点に立つことで彼らが見たものは、共にあるイエス様であります。それと同時に彼らの見たものは、

イエス様と共にあるその歩みが天へと通じているということでした。彼らを変えたのはそのことへの気づきでもありますが、ただ、不信仰との言葉は私たちを深く傷つけるだけでなく、イエス様から遠ざけるものであるのは間違いありません。けれども、その私たちとイエス様は共にいてくださる、そこで彼らはこのことに気づいたので、何かが違うと、そして、それは、私たちの信仰が地上のことだけを語るものではないからです。躓きが十字架につながるように、イエス様と彼らとを繋ぐものはこの十字架です。そして、その彼らがやがて変えられていったのは、彼らの歩みが躓いて終わるものではなく、十字架をへて天上へとつながるものでもあるからです。そのことを私たちは躓けばこそ知るのです。そして、そこで知らされることが私たちとイエス様との近さでもありますが、それゆえ、この近さゆえに、私たちの命は低く卑しいままに終わることはありません。低いゆえに天へとつながっている、それは、イエス様の十字架と復活によって、天と地は完全につながっているからです。だから、私たちは、変わりたい、変わらねばと思わずとも、必ず、自ずと変えられていくのです。そして、この、何かが違うと、そう私たちに気づかせるものが、私たちとイエス様とをつなぐ教会という交わりでもあるのです。

私たちはその生涯を通じて、何度、不信仰というこの言葉を投げかけられるのでしょいか。けれども、それがイエス様との近さを現すしるしでもあるのです。そういう意味で、ここで「不信仰」と言われていることは、私たちにとっての希望の言葉だとも言えるのです。まただから、イエス様の家族、同郷の人々と同じように、私たちもまた、イエス様のことを心から信じる者とされるのです。そして、その私たちすべてをイエス様は天に導いてくださろうとしているのです。ですから、不信仰であることを恥ずかしく思う必要もなく、また、開き直らって無理をする必要もありません。

「不信仰」というこの言葉の背後にあるイエス様のことをしっかりと心に留め、すべてをイエス様にお任せし、私たちが歩み続けるなら、イエス様というお方ゆえに私たちは必ず変えられていくのです。そして、そのための新たな一巡りの歩みがまた始まろうとしているのです。だから、この希望へと向かう新たな歩みを今週もご一緒に歩んで参りたいと思うのです。祈りましょ